「家族応援プロジェクト 2019 in 宮古」を開催しました

人間科学研究科教授 村本邦子

2019年10月21日(月)~11月5日(火)、社会福祉法人若竹会と宮古市社会福祉協議会の共催で、イートピアみやこ市民交流センターと宮古市魚菜市場にて家族漫画展、11月2日(土)、イートピアみやこ市民交流センターにて、「団士郎漫画トーク」「ふるさとの歌や物語を楽しもう」「アートで遊ぼう」「支援者支援セミナー」のプログラムを実施しました。

2016年の台風10号に続き、今年も台風19号による被害と、度重なる災害に胸が痛みます。個人的には、今年の3月に三陸鉄道の北リアス線と南リアス線が全線つながったので、「乗りたい!」と計画を立てていたのに、再び運休となり、本当に残念でなりませんでした。2013年、初めて宮古を訪れ、駅舎で職員さんたちのお話を聞かせて頂いて以来、すっかりファンになってしまったのです。地元の方々、開通に努力された方々の失望はどれほどだろうとため息がでます。いろんなことについて、同じようなことが起きているのでしょう。

プロジェクト会場であるイーストピアには、朝から災害ボランティアが集合していました。ボランティアの人手が足りないと聞いていたので、人手になった方がいいのかもという気持に駆られつつ、私たちは、当初の予定どおり、いろいろなことがあっても細々と続いていく日常としての役割を果たそうと思いました。時間まで漫画展を観てくださる人たちも多く、なにがしか良いものを届けられていたらと願います。

若竹会がリードする「アートで遊ぼう」では、スライムづくりを、「ふるさとの歌や物語を楽しもう」では、宮古読み聞かせの会「ぞうさんのミミ」のみなさんによる絵本や紙芝居、手遊びや歌を楽しみました。

「アートで遊ぼう」には、「子どもたちが楽しそうに創作している様子を見ることが出来て、ほっこりしました。」(30代女性)、「もうすこしシールを増やしてほしい。今日はビーズやシールを入れたり、はったりしてかわいくできた。また作りたい。」(10代女性)、「ふるさとの歌や物語を楽しもう」には、「ずい分高齢になっているので、外に出て少しでも勉強させて頂きたく、天気が良ければ出かけてきております。」(70代以上女性)、「どの企画も面白かったです。ありがとうございました。」(50代女性)などの感想を頂きました。

アートで遊ぼう









「支援者支援セミナー」では、今年も「家族造形法」を使った事例検討を行いました。 「はじめて参加しましたが、とても関係性が分かり、先生がお話しされたように、この 家族みんなが幸せになってほしいなあと思えることが理解できました。ありがとうござ いました。」(50代女性)、「印象的なのは、支援者支援セミナーで造形法を初めて行 ったが、本当に面白い考え方と思う。紙以上の情報が3Dで確認でき、今後の可能性が 拡がった。」(20代男性)などの声を頂き、院生ともども、みなさんと一緒に家族のこ とを考え、学ぶ貴重な機会となりました。

支援者支援セミナー









家族漫画展には、今年もたくさんの声が寄せられていました。「10 代の私には、深くてとても分かりにくかったと正直言えばそうですが、漫画展を通して、共感や理解の部分も多々あり、読んでいると面白く、次の話は何が来て、どのような内容なのだろうかと思い、この漫画展に来てよかったです。」「被災して復旧できずに気軽に気晴らしできるかなぁ~と順路を追ってみました。とっても人間臭くてめんどうで、自分のことでもなければ避けたい状況を丁寧に落ち着いて見せて頂きました。いつか看ることの出来る自他共に豊かな者になりたいですね。」「一介の観光客です。たまたま入ったこの場所で思いがけなく、心に迫る漫画を見せて頂きました。ありますね、こういうこと、という、よくある。しかし、深い世界。人の心の世界。ありがとうございました。宮城県より」「毎回楽しみにしています。いつも考えさせられることがいっぱいです。ありがとうございました。」

「漫画トーク」には、「その人自身の『変化』だけでなく、周りも『変化する』こと。 その両輪がかみ合っていくことが『方向』も作っていくのだろうと思う。その為には各々 の気持ちを『掛け声』のように発信していかないと『方向』のずれも生じていくのだろ うと思いました。」(50 代男性)、「大変良かった。途中からだったけど、若い人とのお話も聞くことが出来、楽しい時間ありがとうございました。変化を知ることが出来、頑張りたいと思いました。」(70 代女性)など、さまざまな方が会場に来て、それぞれなりに何かを受け取って、また私たちに返してくださるという匿名であっても暖かい交歓の場となっていることを感じました。

フィールドワークとして、昨年に引き続きイーストピア所長の齊藤清志さんのお話を聞かせて頂き、毎年お世話になっている田老の「学ぶ防災」、大槌の語り部ツアーにも参加しました。変わりゆくものと変わらないものに思いを馳せつつ、時間というものを感じていました。最後は、いつものように、遠野の大平悦子さんの古民家で、囲炉裏を囲み、手作りの「ひっつみ」を頂いて、民話を聞かせて頂きました。暖かい気持ちで帰路につきました。

斎藤氏のお話を聴く





遠野大平氏宅訪問











若竹会のみなさんも、台風の影響もあり、今年はとくに大変だったとおっしゃっていましたが、それでもこうして暖かく迎え入れてくださるみなさんのお蔭で、無事、9年目のプロジェクトを継続することができたことに感謝します。

宮古プロ2019

団 士郎

魚菜市場、市民交流センターの二カ所で併行開催の漫画展。

振り返って見ると、岩手県での開催は「遠野」「大船渡」「宮古おでんせ」「道の駅なあど」「魚菜市場」「市民交流センター」と転々としてきた。そこには大津波被災からの回復、そして更に洪水/台風の被災からの回復へと、地域が引き受けざるを得なかった 2011 年以降の10年が併走している。

今回も、それぞれの会場で熱心にみて下さる方の姿を、脇からしばらく見ていた。 コンスタントにどなたかが立ち止まって、見知らぬ驚きに遭遇したように集中して読んで おられた。作者としては嬉しくなる瞬間だった。 以前のように、何が事情を抱えておられる方という気配はなく、シンプルに未知のものと の出会いに心動かされておられるようだった。会場アンケートも思いがけず多くの方が書 いて下さっている。これは今年の各会場共通の傾向だ。

魚菜市場漫画展









イーストピア漫画展







漫画トークは中味の事前告知も難しく、どれくらいの参加があるのかいつも心配だが、結果的に会場にいっぱいの人で、話の展開も自分的には快調に語り終えた。リピーターとして 顔なじみの方もあり、様々な繋がりの方からご挨拶も受けた。

実はマンガ家が、自分の作品を読者がじっと見ている場面に遭遇するなど希なことである。私はこの漫画展を続けている中で、しばしばこの幸運に遭遇してきた。その中でも、今回はとくに、静かに深く見入っている人の背中にいくつか遭遇した。冊子を渡した人もあるし、声はかけなかった人もある。どなたにも、自分が作者であることは話さなかった。 今回はその方が適切だろうと思わせる経験だった。

漫画トーク







「東日本・家族応援プロジェクト in 宮古 2019」レポート

文学部教授 鵜野祐介

1.

2011 年 3 月 11 日から 8 年半が経ち、被災当事者であると同時に、被災者支援の側にも立って奮闘して来られた方がた、これまで私たちのプロジェクトの「窓口」となり「仲間」として迎え入れて下さってきた方がたが、何人も体調を崩しておられることを、この間のメールや電話でのやりとりを通じて知った。また、つい 3 週間前の 10 月 12~13 日には、台風19 号により宮古市も土砂崩れや浸水の被害に見舞われた。 $3\cdot11$ の後、2016 年にも暴風雨の被害を受け、そして今回と、度重なる大災害。《どうしてこれほど繰り返し自分たちは苦しめられなければならないのか》、そんな嘆きや怒りが宮古の人たちの心の中に渦巻いていることを危惧しながら、11 月 1 日午後 4 時、 J R 宮古駅に降り立った。

ホテルに荷物を預けた後、改装されたという「魚菜市場」を訪ねた。途中、あちこちの側溝に散布された消毒用石灰が台風の爪痕を残していた。市場の出入口は自動ドアになり、場内の半分を生協(CO-OP)が新たに占め、商品が整然と並んで小ざっぱりとした印象を受ける。午後5時前だったこともあってか、客はまばらだった。正面入口すぐのところに、団士郎漫画展のパネルと東日本・家族応援プロジェクト紹介パネルが設置されている。魚の匂い、磯の香りのする漫画展はここ「魚菜市場」ならではのもので、個人的には大好きな会場である。感想ノートには、たまたま旅行でこの市場に立ち寄ったついでに観たという声や、毎年ここで漫画展を観られるのを楽しみにしているという声が寄せられており、今年もここで漫画展が開けて良かったと実感する。

その後、スタッフ全員と合流し、恒例となった「よし寿司」でのにぎり定食と宮古の清酒 「男山」を玩味する。その美味しかったこと! 宮古に来られたことを感謝せずにいられない。 翌2日は快晴だった。朝9時、プログラム会場となった宮古市民交流センター「イーストピアみやこ」前の広場に大型バスが到着する。この日は救援ボランティアの受入初日ということで、大勢のボランティアの方がたが次々と降りてこられた。被災証明や廃棄物処理の申請に来られた方がたも館内を行き来されていた。《今はとても、漫画の話を聞いたり、何かを作って遊んだり絵本を読んだりしている場合ではないのでは?》、そんな思いもよぎった。

吹き抜けの2階手すりに下げた刺し網に、端切れの布地を再利用して作った原寸大の「新巻鮭」が、大漁旗とともに何十匹も泳いでいた。翌週日曜日(11月10日)には「第33回宮古サーモン・ハーフマラソン大会」も行われる「サーモンのメッカ」宮古ならではのオブジェで、元気が出てくる展示だった。

筆者の主な担当は、午後2時からの絵本やわらべうたを楽しむコーナーの企画・進行だが、昨年までお願いしていた方が体調不良ということもあって辞退されたため、今回「ぞうさんのミミ」の方がたに急遽出演を引き受けていただくことになった。午後1時から会場前で打ち合わせを行う。「ぞうさんのミミ」は平成13年に発足し、現在はメンバー13名で、子育て支援施設、保育所、学童の家などで絵本や童話の読み聞かせをしている地元の読書ボランティア・グループで、名前の由来は「ぞうさんのように耳を大きく広げてお話を聞いてね!」という願いを込めたものだという。

歌と物語を楽しもう









この日は「元メンバー」も含めて総勢7名でお越しいただいた。皆さんとてもエネルギッシュな方で、中でもご高齢の「元メンバー」のお二人は、午前中の漫画トークにも参加してくださっていた。そしてプログラムが始まると、ブラインドを下ろす指示や紙芝居や絵本の位置を見やすいようにずらす指示を出して下さり、物語の世界を楽しむ場をみんなで作り上げることの大切さをあらためて教えられた。「笑いヨガ」というのも初めて知った。演じ方も含めて、あの場所に合ったプログラムを工夫していけばもっと面白くなるだろう。「ぞうさんのミミ」の皆さんと一緒に、来年に向けてプランを練り上げていくのが愉しみになった。《それにしても、これほど厳しい状況の中でも宮古の人たちがこんなに頑張っていけるのは何故だろう?》

3.

11 月3日日曜日、宮古市田老地区と上閉伊郡大槌町で震災語り部ツアーに参加し、その後、遠野で民話の語り部・大平悦子さんの語りを聴いた。「たろう観光ホテル」を震災遺構として残した田老と、「大槌町庁舎」を遺すかどうかで揉め続け、その結果、今年3月に完全撤去した大槌、違いを生んだ最大の要因は、その建物で犠牲者が出たか否かにあるという。「たろう観光ホテル」では一人の犠牲者も出なかった。一方、「大槌町庁舎」では当時の町長や役場職員をはじめ数十名が亡くなった。建物(遺構)を見ることで、自分にとってかけがえのない存在の最期を想起してしまうことは、遺された人たちにとって堪えられない仕打ちとなることは疑いない。但し、この建物が消失することによってかけがえのない存在そのものも人びとの記憶から失われてしまうような気もする――、そんな複雑な思いで旧庁舎跡を見つめる、遺された人の心境をつづったレポートも目にした。

完全撤去から8か月経った旧庁舎跡には、三体の地蔵像を配した慰霊の祠堂が立ち、周囲は一面のクローバー畑に変わっていた。コンクリートで埋め立てたり、別の建物を建てたりするのではなく、緑の大地として残したことは、この地に瞑る御霊にとって、せめてもの慰めになるに違いない。そしてまた私たちも、この緑の大地の上に立ち、震災語り部の話を聴くことで、あの日のことを思い起こし、ここで亡くなられた人びとの無念をいくばくかでも

共有することができるだろう。

宮古市田老地区震災語り部ツアー







上閉伊郡大槌町震災語り部ツアー









遠野では、大平さんにリクエストして『遠野物語』第99話を語っていただいた。明治三陸大津波で自分の妻を喪った夫が、一年後の夏の夜、浜辺の道で妻のまぼろしと出くわす話である。「今はこの人と一緒に暮らしている」と答えた妻のそばに立っていたのは、自分と結婚する前につきあっていたという噂のあった、やはり津波にさらわれたこの村の男だった。そのことにショックを受けた夫は、「(生き残った)子どものことは可愛くないのか?」とつい口走ってしまう。それを聞いた女はさめざめと涙を流すが、やがて連れの男と一緒に立ち去る。

「(夫の) 福二はこのまぼろしを見る必要があったのではないかと思っています」、語りの後で、大平さんはそうおっしゃった。いつまでも妻のことが忘れられず前向きに生きていくことができない福二に対して、「私はこっちの世界で達者に暮らしているから、あなたはそっちの世界でしっかり生きていってください」と妻は言いたかった、少なくとも福二はそのように受け止めたのではないかというのである。生者を励まし見守る存在としての死者という死生観がここには窺える。

4

宮古に着いた 11 月 1 日の夕食後、市内中心部からタクシーで 15 分ぐらいの所にある景勝地・浄土ヶ浜での「ナイトウォーク」ツアーに参加した。年配の男性ガイドさんに案内され、懐中電灯と杖を命綱に海岸へ降り、潮騒を聞きながら海岸沿いの遊歩道を歩いた。この日は月齢が 1 ぐらいで雲もわずかしか出ておらず、星空ウォッチングには絶好の夜だった。ガイドさんの勧めで、全員ベンチにあおむけに寝転がり、天空を見上げる。次第に目が闇に慣れていくにつれ、見える星の数がどんどん増えていった。

一面の、いちめんの星空。はじめのうちは、「あれはこと座、あれは白鳥座」などと、賢しら事を思いながら眺めていたが、やがて考えることをやめていた。ただ星々の発する光のシャワーを浴びる。星々の光に包まれ、見守られて、この世界の片隅にぽつんと自分がいる。ガイドさんが期待させてくれた「流れ星」には出会えなかった(「見た!」という院生もい

た)けれど、心の底から満ち足りていた。

11月10日、NHK大阪ホールで行われた半崎美子のコンサートに出かけた。終盤近くのMCで彼女はこんな話をした。——夜空に輝く星は何万光年も離れたところから地球に光を届けている。今見えている光は何万年か前に発せられたものであり、中には、何万年か経った今はもう消滅している星もあるに違いない。つまり、今も存在している星と、今はもう存在していない星、両方の星の光を私たちは目にしている。生きている星と死んでいる星の両方に見守られて私たちは生きている。それは「人間」にもあてはまるのではないだろうか。今も生きている人、もう亡くなっている人、両方の存在が瞬きながら自分を見守り、励まし、慰めてくれている。そう感じられることで、私たちはまた上を向き、明日へと歩き出すことができるのではないか——。

2017年にリリースしたミニアルバム「うた弁」に収められている「深層」を、彼女はこの 日も歌った。「千の風」になったかけがえのない存在と、今も共にあると実感することで、 それでも生きていこうとしておられる、宮古をはじめ震災復興地の人びとの「決意」もしく は「祈り」を代弁した歌のように感じられた。来年もまた、この地を訪ねよう。

「深層」(作詞・作曲:半崎美子)

あなたをなくした悲しみと あなたと出会えた喜びの 2つを海に沈めたら おんなじ早さで落ちました

あなたが残した思い出と あなたと交わした約束の 2つを空に放したら 両手に残ったままでした

振り向けば光る あなたの欠片(かけら)を 時として伝う 涙に代えて 気がつけば浮かぶ あなたの言葉を 繰り返しつなぐ 届かぬ日々に

あなたをなくした悲しみと あなたと出会えた喜びの 2つと共に生きていく あなたと共に生きていく

東日本・家族応援プロジェクト in 宮古 2019 に参加して

人間科学研究科 臨床心理学領域 M1 改田恭太郎

プロジェクトに参加するにあたって

私は東日本大震災を茨城県で被災した。当時中学2年生だった私は、未曾有の大災害を消化しきれないでいた。そして大学、NPOのボランティア団体に所属し、災害派遣という形で被災地に赴いた。そして現在、心理職を目指している私にとって、本プロジェクトは現地の方々との出会いを通じて過去の記憶を整理しつつも、ボランティアとは違った形で関わることのできる絶好の機会だと考えた。また、事前調査時に宮古市は「伝承」を文化として受け継ぐ市だと感じた。何度も繰り返す震災、それを次世代に語り継ぐその真髄は何にあるのか。そのことを対話を通して知りたいと思い、本プロジェクトに参加した。

プロジェクトを通じて感じたこと

まず、「震災の恐ろしさ」を再度認識することができた。プロジェクト三日目、たろう 観光ホテルで見ることができた津波の映像。普段は青い海が、勢いよくあらゆるものを巻 き込み黒く色を変え、巻き込んだもの同士がぶつかり合うとともに耳を塞ぎたくなるよう な金属音を発しながら、あっという間に町を飲み込んでいった。震災のことを「夢みた い」と語ってくれた人がいた。その映像を見たらその言葉には、「夢かと思うような光 景」であるとともに「夢であってほしい」と願う気持ちがあったのだろうと思った。人的 被害がある、ないに関わらず震災は日常をひっくり返していく。「車のマップでは建物が あるはずなのに、そこには何もなかった」。一瞬で人々の生活を激変させる、その怖さを 体感した。

次に、「防災、減災に対する強い思い」を感じた。宮古市は歴史上何度も津波被害を受 けている地域である。それ故にあらゆる場所で、防災と減災に関する記念碑や像が建てら れていることをフィールドワークや移動時に気づいた。その一つに奥浄土ヶ浜に建てられ ていた「昭和三陸津波の記念碑」がある。その記念碑には、「・大地震の後には津浪が来 る ・大地震があったら高い所へ集まれ ・津浪に追はれたら何処でも高い所へ ・遠く 小逃げては津浪に追い付かる常々逃げ場を用意して置け ・家を建てるなら津浪の来ぬ安 全地帯へ」と戒めの言葉が書いてあった。この戒めをもとに、ある地区では高台への集団 移転を行った結果、東日本大震災では被害がでなかったそうだ。しかし他の地区では、震 災の際に 14m にも及ぶ防潮堤に対して過信をし、逃げなかったがために、亡くなった方も いらっしゃったそうだ。「すぐ後ろには避難道があったのに。防潮堤はあくまで逃げる時 間を稼ぐためのものだと知らなかったがために。」とても悔しそうに、悲しそうに語り部 の方が語ってくれたことが印象に残っている。ハード面の対策はとても重要なものだ。し かし、どれだけ素晴らしいものを作ったとしても、それを作ることになった真意を知らな い限り、今後も同じような悲しい出来事が続いてしまうだろう。ハードな情報は調べれば すぐに分かってしまう現代。しかし、自然災害などの緊急時に「どうやって自分の命を守 るか」は調べても出てはこない。つまり、防潮堤や外部から発信される情報を鵜呑みにせ ず、常に自分の状況を自分の力でどうにかしていく力こそ、本当に求められる力だ。「て んでんこ」これは、「人のことをかまっていないで、自分の命を生きろ」という意味であ

る。自分が自分の命を守るために動くこと、その行動こそが誰かを動かす原動力となる。 これから先「地震を知らない子供たち」が生きていく未来、彼らに同じような悲しい経験 をさせないためにも、私たちは知りえた物事の本質を伝えていく使命があると感じた。

最後に私は大きな勘違いをしていたことに気づかされた。本プロジェクト前には、「行くからには何かしら力にならなきや」と強く意気込んでいた。この「何かをしてあげる」という考えが大きな勘違いだったのである。三日間を通じて、そもそも現地には先ほども述べたような「強い意志」があった。先人たちがそうしてきたように、「次の世代へ繋ぐ」ことを語りを通じて行っている。そこにある力を「信頼する」ことこそが、私たちが何か行ううえで大切なことだと感じた。「何かをしてあげなきゃいけない」というのは、完全にエゴだ。私たちに何かできることなんてない。けれども、何もできないわけじゃない。そこを見誤ってはいけない。現地の方々には想いがある。その想いがこぼれないように、汲み取り広げていくことはできるかもしれない。自分が本プロジェクトを通じて見聞したことを、周囲に伝えていくことからはじめようと思う。

謝辞

本プロジェクトを企画、実施する上で関わってくださった皆様、よそ者を暖かく受け入れてくださり様々な想いを語ってくださった岩手のおじちゃん、おばちゃん、お父さん、お母さん、子供たち、そしてともに活動に臨み想いをぶつけ合えた大学院の仲間に、この場を借りて感謝申し上げます。

「東日本・家族応援プロジェクト in 宮古」 に参加して 人間科学研究科 臨床心理学領域 M1 髙村希帆

私は、阪神淡路大震災後に生まれ、東日本大震災も少しの揺れだけで大きな震災に出会ったことがなかった。東日本大震災のとき、報道で甚大な被害の状況を見てきた。しかし、当時中学生の私は何もできなかった。あれから8年。立命館大学院で東日本・家族応援プロジェクトに出会った。このプロジェクトは今年で9年目。月日が経ち、風化されつつある中、このプロジェクトが継続して行われており、参加できる状況にあるこの繋がりを逃すわけにはいかないと、参加を決意した。

宮古に伺う前に調査を行い、震災当時の様子、復興の進捗状況などを学んだ上で、現地へ向かった。現地では調査していた以上のことが学べた。ネットに載っていない宮古の人たちの想いを直接感じることができた。東日本大震災で出来なかった事を今後繰り返したらいけないという強い思いから、この震災を忘れないように活動していることを知れた。防潮堤のハード面と言い伝えや教育というソフト面のどちらもが重要であることを何度も聞いた。

石碑や学校の校章、校歌、「てんでんこ」という言葉など、この土地で今まで生きてきた人 が津波とともに生きる知恵を伝える努力の塊だと感じた。

東日本大震災とは別件であるが、現地に向かう直前に、台風 19 号が再び宮古を襲った。3 月に全線再開したばかりの三陸鉄道は再び運休。土石流、川の氾濫、大きな爪痕を残した。プロジェクトに関わってくださった方も被害に遭われていた。報道で見て大変心苦しかった。現地でも爪痕を随所で見た。それでもみなさんプロジェクトを手伝ってくださった。参加してくださった方も被害に遭われた方はたくさんいると思う。2 日目の活動開催場所は台風のボランティアの人たちの集合場所でもあった。ボランティアの人を見ているとみんなで頑張ろうとしている想いが伝わってきた。私たちはボランティアとして今回参加はしていない。そのため実際現地で片付け作業などはしていない。しかし、漫画トークやアートワークなどを通して宮古の方々の下がっていた気持ちが少しでも和らいだり、参加している時間だけでも被害のことを忘れて楽しんでいただけていたら嬉しい。そう思っている方が一人でもいれば直接的ではないが、間接的に支えるお手伝いの機能が果たせたのではないかと思う。

何年後かに、南海トラフ地震といった大きな地震が予想されている。今回知ることができた言い伝えや、地元の方々が教えてくださったことは他の地方でも生かすことができると思う。お話くださった方が口々に言っていた、「語り継がないといけない」「繰り返してはいけない」「未来のために」という言葉。この言葉によって語られた話を私が聞いたことで、私の周りにも伝えられる。語りが広がる。証人としてそれを伝える大切な役をいただいたと感じる。微力ではあるが、私も未来のために現地の人の思いを他の人に伝えていきたい。

今回プロジェクトに携わってくださった方々、フィールドワークでたくさんのお話を聴かせてくださった方、現地で出会えた方々に深く感謝を申し上げます。ありがとうございました。

一刻も早く台風19号の被害が復旧することを祈っております。

東日本・家族応援プロジェクト 宮古 2019 に参加して

対人援助学領域 M1 吉岡玲子

【プロジェクト参加目的】

2011年3月11日、当時京都の立命館大学でキャリア支援の仕事をしていた。市内のと ある女子高校までキャリア教育の出張講座の打ち合わせにタクシーで移動中だったのでニ ュースも見ておらず、京都も揺れたのだが車中のため気が付かないでいると奈良に住む母 から着信があった。かけなおすと「東北が大変なことになってしまった」母は東北にゆかりがあるわけではなかったが、今まで聞いたことがないほど悲哀に満ちた母の声を聞き、ただごとではないのではと胸がざわついたのを今でも覚えている。3月11日といえば大学生たちは卒業判定が出て卒業合格した者は、4月からの就職にむけて準備をしていたところだった。京都の下宿を引き払う段取り、就職のため実家に帰る準備などすべての予定が白紙になった学生もいたであろう。東北にゆかりのある在学生のサポートをしなくてはという思いをもち、時を同じくして行政からも特別対策の依頼が各大学にあり、卒業生支援の仕事と向き合ったことを今でも覚えている。

今回このプロジェクトに参加しようと思ったのは、海とともに生きている人たちの思いを知りたいと思ったからだ。歴史的に何度も大津波に見舞われてきた宮古。流されては再建し生活を取り戻していく人のレジリエンスに少しでも触れることができればと思う。

宮古を中心に、プログラムで出会った方、フィールドワークで出会った方、個人的に出会った方など総勢 20 名余りの人とお話させていただいた。帰阪して大阪の地から遠く東北沿岸地域を振り返る。

【プログラムを通して感じたこと】

キャンパスでも団先生の話を聴いたことがあるが、宮古で聴いた団先生の話はさらに勇気を与えてくれる内容に感じた。自分で自分の課題を克服することが「心を鍛える」ことであるといわれたが、学生支援の現場で常に意識している「Independent Learner を育てる」という視点と重なった。

主催のすきっぷさんはじめ、多くの未就学児、小学生や中学生、事業所すきっぷに通っておられる市内の方々や一般の方とアクティブに交流できた。スライム作りはとてもシンプルなのだが、分量の配合を間違えるとなかなかスライムにならないためとても盛り上がり、うまくいかない場面で交流がさらに深まったように思う。

ぞうさんのミミさんによる紙芝居、絵本の読み聞かせ、歌、手遊びの企画。一般参加の 市民の方がとても楽しく関わってくださり、絵本や紙芝居が世代を超えたコミュニケーションのツールとしてフィットすることを再認識できた。

最後に村本先生が家族造形法を用いた事例検討のワークショップを実施した。今回、家族造形法を体験したのははじめてであったが、その手法が客観的な視点でみることを助けるものであることがよく理解できた。

【フィールドワークを通して感じたこと】

2011年3月から8年7か月経過した宮古にて、大震災の跡と向き合えることができたことは私にとって大変意味があった。映像や写真から想像するに震災直後は、心も体力もすり減るとてつもなく負荷のかかる日々に追われていただろう。たろう観光ホテルで見せていただいた社長が撮影した4分間の映像は想像を絶するものであった。沖から白波を立てて現れたと思ったら、ほんの十数秒で防潮堤を超え、あっという間に町全体を破壊した。震災

から8年半。まだ整地のままで残ってる場所も目にしてきた。いったい復興はだれがするものなのだろうか。ある飲食店のご主人の言葉が心に強く残る。「最近の人は、だれかがしてくれるの待っている。おれたちの親なんかは、チリ津波があって家がなくなってもすぐに自分たちで建てたよ。だれかの助けなんて待ってられないよ。」団先生が漫画トークでいわれた「心を鍛える」と重なった。そして、この地にこのプロジェクトを通して少しでも関わりをもった私は、心を鍛えるだれかのそばでそれを見届ける役割を担っていくこととなる。このプロジェクトへの参加を契機として、改めてアーカイブの果たす役割や教育の役割を認識して仕事をしていきたい。

村本先生がこのプロジェクトを 3.11 発生後すぐに平田さんや先生方と立ち上げ、ここまで継続されたから私にも参加の機会が巡ってきたことに感謝しつつ、プログラムを各地で主催してくださる東北のみなさまに心から敬意と感謝を表したい。10 年の節目を迎えた後に、どうやってこの地と関わりを持ち続けるのかも考えていきたい。

継承されていくことについて

臨床心理学領域 M1 大谷通高

宮古に着いて初日の夜、学生同士で、宮古駅付近の盛り場にある一軒の居酒屋に入った。 夜22 時近くのことである。夜ご飯は済ませていたので、軽くつまめるものと、少しのお酒 を嗜み、各々この実習のことを話していた。ふとお店のなかを見渡すと、津波到達の目印が 柱につけられていた。それは、この店に限らず、宮古のお店や町のいたるところで目にする 痕跡だ。

お店は海から少し離れているが、津波到達の目印は人ひとりを飲み込むほどの高さがあった。

ここまであるのか、と自分の背丈ほどの津波がこの店を襲ったことに慄いていると、店主 さんがおもむろに震災当時のことを話してくれた。店の仕込みを終えて喫茶店でくつろい でいたら地震が来たこと、津波が来ると思って高台に逃げたこと、被災後お店は津波で壊滅 的であったこと、妹さんがなくなったこと、8年前の出来事を勢い話してくださった。

そのなかで印象的なお話がある。店主さんの親御さんたちのこと、お店で関わりのある人たちのことだ。親の世代は、津波があったとき避難所を1日で出され、何もない家に帰っていった、自分たちの親は一から立て直していて、その親の背中を見て自分は育ってきたこと。だから店の片づけはボランティアの人たちの力を借りず自分たちだけでやった。でも、お店はなじみのお客さんや業者さんが力を貸してくれた、関東のお客さんが水を持ってきてくれたり、盛岡の業者さんが食材を準備してくれたり、震災後2か月足らずで開店したんだ、と店主さんは当時の状況を、熱をたたえて、今でも自分でも驚いたことのように話してくれた。

過去の世代の姿をみて、それが今を乗り切る指針として継承されていること、お店での繋がりが、自分の今を支えていること、そのような過去の世代の姿勢や人との繋がりが生きる 糧になり、今の自分を支え繋がっていることを店主さんは実感を込めて話してくれた。

実習最終日の3日目、田老地区での震災の語り部さんの話を聞かせていただいた。そのとき、この地区の道路が山の上を目指して碁盤目状に区画されていることを教えてくれた。それは過去の世代が、津波が来た時に備えて避難経路が分かりやすいように区画していた。この地区はそうした昔からの知恵に根付いた場所であることを力強く話してくださり、このことを将来の世代に伝えていくことが重要であることを語ってくれた。

継承すること、生きて知りえた経験を時を超えて紡いでいくこと。昔に生きた人、今を生きる人、未来を生きる人、時をつなげて人と人とがつながり、より良く生きようとする営みとして、継承することがある。それは今回の実習で学んだ事実である。

東日本・家族応援プロジェクトに参加して

臨床心理学領域M1 水田恵理子

本プロジェクトに参加して、一番印象に残ったことは「人と人とのつながり」であった。 祖父母が東日本大震災の被災者という理由から、震災の事を詳しく知りたいと思い参加を したのだが、ただ単に震災の情報状況を学んだだけでなく、実際に震災を体験した人の生の 声を聞くことで被災者の心情について知ることが出来た。実際に被災地に足を運び、そこに 住む人たちのお話を聞くことで、復興するまでの道のりがどれほど険しいものだったのか ということ、辛いけれども前を向いて皆で協力して頑張ってきたこと、津波・地震がどれほ ど恐ろしいものだったのかということを身をもって体験することができ、貴重な3日間で あった。

1日目は、浄土ヶ浜のナイトウォークに参加をした。美しい星空に感動したが、同時にここで津波が起きたという事実に怖さも感じた。暗闇の中で闇と波にのまれてしまうような気がして怖くなった。ナイトウォークからホテルに戻るタクシーの中で運転手さんから防波堤の話を聞くことが出来た。宮古の防波堤を見た時、海がすぐそばにあるのに見えないというところがなんだか怖かった。防潮堤は津波を完全にせき止める役割をしているのではなく、第一波を止めるためのものであることを知った。その後に訪れた「無礼講」の店主さんからも震災のお話を聞くことが出来た。お店の中には、津波到達時の高さを表すシールが貼ってあった。宮古の街を歩いていると津波到達時の高さを示す看板などが多く見られた。自分の身長を優に超す高さまで津波が到達しており、看板を見るたびに恐ろしさを感じた。「無礼講」の店主さんは津波の被害を受けたが夏までには店を全部立て直したと言う。それは自分の親世代が津波の被害に遭っても避難所に逃げるのは1日だけという精神的にも肉体的にも強い姿を見て育ったからだそうだ。そして、全国のお客さんがお店の再建のために食料を届けてくれたり、がれきの撤去を手伝ってくれたためであった。他人同士だけど、み

んなで助け合いお店をまた開店することができた。店主さんとは思いがけない出会いであったが貴重なお話を聞くことが出来、嬉しかった。

2日目の、アートで遊ぼうのスライム作りや絵本の読み聞かせでは現地の人と温かいコミュニケーションを取ることが出来た。参加者がだんだんと笑顔になっていく姿をみることで私自身も心が癒された。一緒に何かをする、共有することで、言葉よりも身体全体で相手のことを感じることができた。支援者支援セミナーの家族造形法では、実際に当事者の視点に立つことで、相手の世界を疑似体験し素直に全てを感じることができたため、通常の事例検討よりも当事者の気持ちをより深く知ることが出来た。無意識に互いを支え合い温かみが感じられる家族のようなプロジェクトであった。

イーストピアみやこの所長であるサイトウさんの震災体験のお話では、「記録をすることの重要性」を感じた。東日本大震災から 10 年がたち東北地方以外の人たちの関心が薄れてきたように思われる。風化させないようにするために、このようなプロジェクトを東北以外でも開催出来たらいいなと思った。

3 日目に訪れた道の駅たろうの佐々木さんの震災教育に対するお話では、「どんなにハード面(設備)でしっかりしていてもソフト面(教育)でやらないといけない」という言葉が印象に残った。防潮堤などの設備をしっかりしていたにも関わらず、多くの犠牲者が出てしまった原因はやはり、教育面でしっかりと対策が取られていなかったからだとおっしゃっていた。「防潮堤があるから大丈夫だろう」と油断をして逃げなかった人が亡くなっている。津波の恐ろしさを教育現場で伝える場合、防潮堤を見学するのではなく、たろう観光ホテルなどの震災遺構を直接見たほうが津波の恐ろしさをより鮮明に伝えられることを実感した。

大槌町ではまず初めに大槌町旧役場跡に向かった。現在も大槌町の役場に働いている方は3月11日になると役場に近づけなくなる人もいるようで、震災から復興したとは言え心の中にある傷はまだ癒えていない人がいるという現実を知った。また、大槌町はリアス式海岸のため、海岸が入り組んでおり、水平線が見えるところ、みえないところがあり、津波が見えたのは山の先だったようだ。実際に高台からの街の景色を見て、水平線がどこにあるのかが分からなかった。津波がどこまで到達しているのか分からず逃げ遅れてしまったという状況が想像できた。

これは大槌町の人に関わらず東日本大震災で被災された方のすべてに言えることであるが、その地域の人と人との繋がりを感じる場面が数多くあった。東北の人たちの温かさときずなの強さを感じた。東日本大震災のような大きな地震が関東や関西などの地域で起こっても、他人と繋がりを持ちお互いを助け合うことが出来るのだろうか。

プロジェクトが終わり花巻空港で解散した後、盛岡の祖父母の家に向かった。プロジェクトで 体験したことを祖父母に話すと、「震災について勉強してくれたことがすごく嬉しい。若い人たちが震災のことを忘れずにいてくれたら、次にまた大きな地震が来る前に対応できると思うから」と言っていた。今回のプロジェクトで学んだことを友達や家族など身近な人に伝えてみることろからまずは始めてみようと思う。